[GRAPEVINE]

函館から新しいワインの文化発信を

（株）はこだてわいん　企画室室長　宮田　直

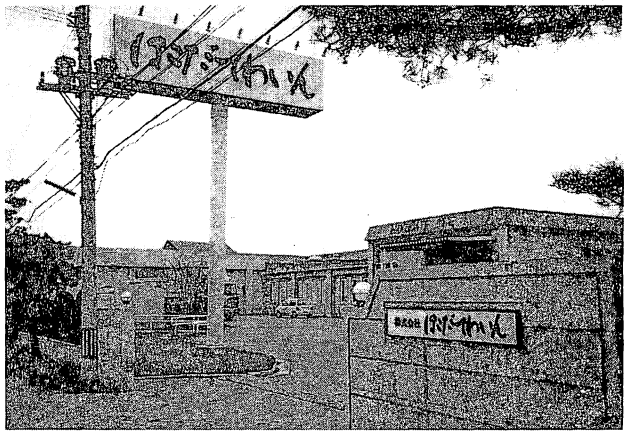
函館といえば、「文明開化」の古き香りの漂う街として有名ではありますが、函館とブドウのかかわりもまた古いものがあります。幕末の1865年に、当時の箱館奉行がプロシア人ガルトネルに許可を与え、函館から北へ十数キロに西洋式農業による七飯官園が誕生した頃からはじまります。この七飯官園は箱館戦争平定後、政府の所属となり七重開墾場と名称を変更し、明治15年の記録では赤ブドウ「コンコード」「ハートフォルド」種の栽培が行われたのと同時にワイン製造及びブランデー製造の記録が残っています。

その後、昭和4年6月の駒ケ岳噴火ののち、七飯町に隣接した森町に山ブドウが勢いよく芽吹きはじめたと言われています。そして当時の森町長である望月氏が噴火の打撃から立ち直る為に果樹園を設けるのと同時に醸造免許を受け、ワインづくりが函館近郊において本格的に始まりました。昭和7年に小原商店がこの免許を譲り受け、同商店が発売したのが、山ブドウを原料にしたスイート系のワインでした。商品名は、「じ来」「白熊ブドウ酒」であり、北海道のみならず樺太、千島まで広まったとも言われています。

昭和48年、小原商店と函館ヤクルト販売が共同出資し、駒ケ岳酒造が誕生します。そして昭和59年に本社を七飯町に移すと同時に「株式会社はこだてわいん」に社名変更しました。

駒ケ岳酒造設立当時は七飯町近郊の森町にワイン専用ブドウ品種の契約農園がありましたが、現在では

余市契約農園



は七飯町から北へ約150キロほど離れた余市町の農家と契約栽培によりブドウの供給を受けています。主力となる品種は「ケルナー」「ミュラー・トルガウ」「セイベル」となっており、他の希少栽培品種としては「ピノ・ノアール」もありますが、この品種に限りましては北海道の風土とあまり相性が良くないのか色づきが悪いのが実情です。この余市町の栽培ブドウの結実が1994年に収穫された貴腐葡萄でありました。収穫量で3.6トン、糖度は高いもので45度であり、翌年に発売された「貴腐わいん1994ケルナー」は当社にとって誇りとも言えるワインとなりました。その後、1998年にもわずかながら貴腐葡萄が収穫出来、北海道の地から貴腐ワインを世に送り出すことが出来るのはワイナリーとしてこの上ない喜びとなっております。

当社はどちらかといいますと、「通常」のワイナリーとしてよりは、昔より「フルーツワイン」のはこだてわいんとして市場で受け入れたれてきた感があります。現在においてはブドウ以外の果実からつくった「ワイン」としましては、いちご、メロン、梨、リンゴ、ブルーベリー、マルメロ、桃などがありますが、そもそもの始まりは会社設立当初、ワイン用の原料葡萄の入手が困難であった為、「甘い果実でワインをつくろう」ということがきっかけとなったことでした。これら「フルーツワイン」はこの十数年来の地方自治体の「一村一品運動」と相まって、当社におきましては主力商品群となっておりま

す。当社では地方自治体等より請け負った果実原料によるワインの委託生産は、南は種子島や小笠原諸島まで含めて全国で40銘柄前後となっております。

ひところの「ワインブーム」も落ち着きを見せ、今後は輸入ワイン等各メーカーにおいて厳しい競争の時代が到来するものと思われます。今後の国内ワイナリーの課題としてはどうやって企業として特色を出していくかにかかっているかと考えられます。当社もまた、身をひしきめてこれからの時代を乗り切っていかねばならないと考えており、異国情緒漂う函館の地より、新たな風をワインの世界、アルコール飲料の世界に吹き込まんと模索している毎日であります。